

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 石川啄木と新渡戸仙岳

A Relationship between Ishikawa Takuboku and Nitobe Sengaku

doi:10.29714/TKJJ.201006.0001

淡江日本論叢, (21), 2010

作者/Author：林丕雄(Pih-Siung Lin)

頁數/Page：1-4

出版日期/Publication Date：2010/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201006.0001>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



【特別寄稿】

石川啄木と新渡戸仙岳

林丕雄

淡江大学名誉教授

日本文学史上、石川啄木は歌人として短歌の改革及び平民詩を唱えた人で、日本人は彼を国民詩人或は悲劇的詩人と呼んで敬っていた。新渡戸仙岳は文学史上にその名こそ残さなかったけれども、盛岡高等小学校の啄木の先生であり、後に岩手日報の編集長になった。小学校時代の恩師と愛弟子の関係と言え、それまでのことであるが、実は新渡戸仙岳は啄木に多大な影響を与えているのである。

最近の啄木研究は啄木の詩のリズムの研究から思想関係へと移り、啄木の人物像を詩人からもっと国際感溢れる思想家への方向に向けている。その功績は新渡戸師の影響を受けていると言ってもよい。あらましから先に述べると、中国にまつわる文化面の問題が多い。

啄木は尋常小学校を首席で卒業し、神童と名のつく良い成績で盛岡高等小学校へと進んだ。新渡戸仙岳先生の勲陶を受けて十番の成績で盛岡中学へ進学し、金田一京助という良き先輩の指導を受けながらも、中学校を途中で退学し、明治のエリートの仲間入りをすることができず路頭に迷っていた。父一禎が住職を追われて一家の生活の重荷が啄木の肩に重くのしかかり、彼もふるさとを追われなければならない浮き目に遭い、函館を皮切りに北海道を点々と漂泊を続けた。

東京に舞い戻った啄木は少しの原稿を書きながらも、生活は一向に改善されず恩師の新渡戸仙岳と通信をしながら、岩手日報に投稿している内に、師にもっと原稿を送ってそれを生活の糧にしようと思って、明治四十一年九月二十八日付けの手紙に次のようなことを書いて送った。

毎日通信を書いて送ることにして地方の新聞よりいくらか貰

airiti

ふ工夫あるまじきかとの一案に御座候、これだけの事ならば毎朝新聞を読んでから一時間か一時間半の時間あれば出来る事故、さして苦痛にもある間敷と存候、……報酬は、無論いくらにても生活のたしにさへなればよいといふ程度にて宜敷いのに御座候、……先生の御指金にて、小生をお救ひ下され候ふ御積りにて御採用の事叶ふまじく候や、誠に申し訳なく候へど、万一出来さうの事なら可然御取計らひを仰ぎ度偏へに願上奉り候、尤も御採用被下候ふ上は、決して怠け申すまじく、……

右唐突ながら御高見奉伺候、先は御願事迄 草々頓首

石川啄木拜

新渡戸先生 御侍史

啄木より以上の如きお願いがあつて新渡戸仙岳は愛弟子を助ける積りで、啄木からの通信がある度にそれを岩手日報に掲載し、その原稿料を啄木に送り続けた。そんなことをしている内に啄木の言論は次第に政論へと傾き、他人が予想もしなかつた火予言を吐かしたためたのであつた。

啄木は清末に澎湃として勃発した中国革命は哥老会等清の地下組織の力を借りて成功に導くだろうと予言し、彼は中国へ行って革命に参加したいとまで言っている。

啄木の一大予言として世間を瞠目させた問題は明治四十一年十月十三日新渡戸仙岳に送った原稿である。

烏有先生（新渡戸仙岳先生の号）足下、人よく今の日本を以て古希臘に比す。其説必ずしも所依なきにあらず。然らば乃ち、古羅馬の大業は之を支那の将来に待たむ乎。世界第二十一世紀の劈頭に大呼するもの、夫れ李杜二聖を出せるの民乎。謹んで足下の説を聞かむと欲す。頓首

airiti

とある。新渡戸仙岳はこれをそのまま岩手日報に掲載した。

開国以来始めて外国に宣戦をして、日清、日露の大戦に勝利をおさめた日本は、これによって世界の列強に名を連ねた。啄木は日本国民が有頂天になっている時に、敗戦した中国が二十一世紀の劈頭に日本を凌いで古羅馬の大業をなすと言って憚らなかった。幸いにして当時の日本官憲は地方新聞の言論に対して、干渉の爪を差し伸べなかった。しかし国民感情からして、戦勝後の日本に斯る言論は許されるべくもなかった。今の時点から見れば、啄木は大予言者と言わざるを得ない。勿論二十一世紀に羅馬の大業をなすと言ったけれども、中国が今のような覇権主義国家になるとは思っても見なかったであろう。しかし、啄木は確かに中国は今のように米中露三強の仲間入りし得ると見ていたのである。理由なしに彼は天才的であったのだろう。天才というのは行き詰まった所で才能を発揮するものだと言われているが、啄木は生活に困窮していた時に、新渡戸仙岳の助けを得て、次々と今の人を驚かしめる政論を発表し、思想的な天才を発揮した。

啄木は又新渡戸仙岳の通信によって、世界第二十一世紀の劈頭に大呼するもの、夫は李杜二聖を出せるの民乎と言っているが、啄木は普通の日本人が白楽天のロマンチックな詩を好むのに対して、啄木は杜甫が最高だと明治四十一年九月二十九日の日記に記している。

啄木はロマンシズムよりも北海道漂泊後の自分の前途を憂いているので杜甫の漂泊の美学を己れの手本としてきた。杜甫の漂泊は将来の仕官生活に何らかの勉強になろうと考えて社会現象をよく見聞きしたかったからである。この杜甫の漂泊の詩が啄木の脳裏に痛く泌み付いたのである。

啄木は明治三十七年八月末北海道を始旅行して津軽海峡を渡った時

「上甲板の欄干に凭りて秋天一碧のあなた、遠く日本海の西の波に沈まむとする落日を眺めつゝ、悵然たる愁懷を蓬々一陣の

airiti

天風に吹かせ、飄々何所似、天地一沙鷗と杜甫が句を誦し……」

という感懐を述べている。これで啄木が杜甫の漂泊の生活に共鳴を感じていたことがわかるので、比較文学の研究方法で啄木が杜甫の影響を受けたことが立証できる。この句は「旅夜書懷」という杜詩の中の一節で、全文は「名豈文章著 官因老病休 飄飄何所似 天地一沙鷗」で、自分の不運を歎いた詩である。又啄木の「一握の砂」の短歌集の詩稿は全て新渡戸仙岳に送った明治四十一年十月十三日の原稿日付以降に作詩されているので、新渡戸仙岳に自分の見解を問いつけてから、「一握の砂」の作歌を始めたものと思われる。

啄木は原稿代を稼ぐ積りで新渡戸仙岳と通信している内に杜甫の影響を受けつつ、「一握の砂」の歌稿を書いた。杜甫が見聞きした唐末期の社会現象を詩に書いたように、啄木も自分の一生と漂泊を回想しながら短歌に書いて、日本近代文学史上に「一握の砂」の作品を世に問うた。新渡戸仙岳の存在があればこそ彼の偉大な仕事が完成し得たのである。

注記：この論文は、2005年12月刊行の『台湾日本語文學報』創刊20号記念号1P～4Pに掲載された同名の論文を、台湾日本語文學會の同意を得て、林丕雄先生の傘寿の記念として転載したものである。